氏　　名	菅野　美佐子
学位（専攻分野）	博士（文学）
学 位 記 番 号	総研大甲第 1083 号
学位授与の日付	平成１９年９月２８日
学位授与の要件	文化科学研究科　比較文化学専攻 学位規則第６条第１項該当
学 位 論 文 題 目	参加型開発を通した女性の自己変容過程に関する人類学的研究　－北インド農村社会を事例として－
論 文 審 査 委 員	主　査　准教授　南　真木人 教授　岸上　伸啓 准教授　宇田川　妙子 教授　杉本　星子（京都文教大学）

論文内容の要旨

本論文では、ある社会のジェンダー規範のあり方が、参加型開発プログラムという外部からの力によっていかに変化するのかを、そこに巻き込まれた当事者個々人の視点に着目しつつ検討し、社会変容の一端を明らかにすることを目的とする。

本論文が対象とした北インド農村社会では、現在、社会変化の様々な要因に曝されている。その一つが、本研究で取り上げた参加型開発プログラムである。インドでは貧困女性を対象とした政府のプログラムが1980年代より急激に増加しており、強固な家父長制に特徴付けられてきた農村社会でも一定の変革が迫られつつある。そこで本論文では、社会変容をもたらす一事象としての参加型開発を当事者たちがいかに受けとめ、受容していくのかについて、彼らの主体的行為に着目しながら検討をおこなった。

第1章では上記の流れを明らかにするとともに、これまでの開発や社会変容に関する人類学的研究を整理したうえで、先行研究の問題点を指摘した。この章で試みたのは、一つには従来の女性をめぐる開発の議論が、女性の現状や開発を通じて変化する状況を均質で一様のものとして描いてきたことに対する批判的議論である。もう一つは、当該地域のジェンダーをめぐって緻密な議論を展開してきた民族誌的研究が、変化を排除するような閉ざされた社会を前提としており、変化を十分に捉えてこなかったことへの批判である。つまり、両研究分野の議論を批判すると同時に双方の特性をつなぎ合わせることで、開発という事象が当該社会にもち込む変化を、一様で均質的なものとしてではなく、価値体系や社会関係などが複雑に錯綜した状況のなかで捉えることの重要性を指摘した

続く第2章では、開発プログラム実施の前提となる当該社会のジェンダーをめぐる観念や規範について、女性たちの語りを交えながら記述した。当該社会では、女性たちを取り巻く状況はおもに結婚を通じて規定されていく。つまり、婚家において家族からの役割期待に対応しながら、既婚女性としての規範を学び取ると同時に、妻、嫁、母としての自己を確立させていくのである。しかしながら、女性たちの暮らしからは、過度の労働や出産、育児、家族との関係性などについて、少なからず苦悩を抱えている様子がみられた。女性たちは語りのなかで、自らの苦境を「カルマ」や「キスマト」といった表現で説明した。カルマは「定め」を、キスマトは「運」を意味する概念であり、こうした概念が、女性の置かれた立場や状況、規範、役割をすでに定められた運命として受けいれるための説明原理として機能しているのである。しかし、女性たちはカルマやキスマト、つまり運命論的に自らの苦境を受け入れることには必ずしも納得していなかった。実際に、女性たちの中には窮状や規範にとらわれた状況を改善し、カルマやキスマトを乗り越えようとする意思を表す者もおり、女性のこうした思いを後押ししたのがマヒラ・サマーキャの活動である。

第3章では、マヒラ・サマーキャに参加する人々が、活動を通じてマヒラ・サマーキャの一員としての自己を確立させていく過程を検討した。政府主導型の本プログラムでは、女性たちが行政的なタテ型の構造とそこに内在するメンバー同士の序列的関係性を利用し、相互に「頼る」、「世話をする」という関係性を生み出していた。つまり、職員女性やベテランの農村会員など序列性の上部に属する者がその下位に属する他の会員の世話をおこない、それに対する見返りとして、彼女たちから信頼や尊敬、感謝などを獲得するという関係性が築かれていていたのである。このような「頼る」、「世話をする」関係性は、双方が

対等な立場にある状況では成立しない関係であり、彼女たちはプログラム側が否定してきた序列関係をあえて利用しながら、相互依存的な関係性を作りだしていた。またそのなかで、自己の役割や位置づけを認識し、マヒラ・サマーキャの一員としての自己を形成していたのである。こうして活動実践を通じて形成されたマヒラ・サマーキャの一員としての自己は、女性たちがそれまでに形成してきた婚家における妻、嫁、母としての自己に新たに加えられ、女性たちは婚家のみにとどまらず、プログラム内部にも自らの役割や存在意義を見出すようになっていった。

一方、マヒラ・サマーキャがもたらす新たな価値観や行動規範は、当該社会における既存の規範とはきわめて異質な性質をもつ。それゆえに、女性たちは婚家においては、妻、母、嫁としての自己へと再び引き戻されることとなる。そこで第4章では、再び視点を農村に移し、女性たちの活動への関わり方と、その背後にある当該社会の観念や規範との関係性について考察をおこなった。当該社会では多くの女性が依然として開発による変化に戸惑い、積極的な関与を躊躇する状況がある。その理由の一つには、第2章でも触れたカルマや穢れを意味するガンダーなどのこの社会のヒンドゥー的観念と結びついていることが分かった。彼女たちの語りには、家の仕事や育児などカルマによって定められた既婚女性としての役割や行動規範を蔑ろにして活動に参加するという行為が、規範から逸脱した不道徳（ガンダー）な行為であるという観念が表されていた。つまり、既存の規範を侵すことに対する不安の意識が、彼女たちを参加から引き止める要因となっていたのである。一方、彼女たちの語りからは、困窮した生活といった自らのカルマを変革したいという願望も表されていた。すなわち、女性たちの自己内部には、カルマの定めに従わなければならないとする従来の規範と、カルマを変革したいという思いが混在しており、その狭間での葛藤や戸惑いが語りや行為などの自己表出の揺らぎとなってあらわれていたのである。本章ではこの揺らぎを「多元的自己表出」という概念で示し、この概念を用いながら当事者たちによる開発の受容のあり方を検討した。「多元的自己表出」とは、複数の性質の異なる価値観や社会関係におかれた個人が、他者との相互交渉をおこなうなかで、相手や状況、立場などに応じて自己表出のあり方を選び取り実践する行為を表す。マヒラ・サマーキャという異質な経験を通して形成された女性の自己は、既存の規範との狭間で揺らぎをともないながらも、婚家における自己表出のあり方に少しずつ変化を生み出していた。つまり、揺らぎのなかに生じる女性たちの変革への思いが、自己を表出する上での時と場所、相手などある一定の条件が揃ったときに、権力をもつ他者に対して発話や行為として発現されていたのである。本章では、このような多元的自己表出の反復を通して、女性たちが既存の権力構造に変革を主体的に働きかけ、さらに変化を実現していく状況を明らかにした。

本研究では、「多元的自己表出」という視点からある社会が直面する変化の状況を捉えることで、序論で批判的検討を加えた、いかなる女性の変化も排除するような閉ざされた権力構造を強調する議論を反証することができた。また、開発による変化を単線的に捉えてきた先行研究に対しても、開発に巻き込まれた当事者たちが様々な社会関係や規範、役割にとらわれつつも、従来の規範の変換を主体的に模索する様相を丹念に描き出すことで、新たな視点を提示できたと考える。

論文の審査結果の要旨

本論文は、北インドのウッタル・プラデーシュ州にある農村S村において、低所得階層の女性が開発をいかに捉え、受容しているのかを当事者の視点から考察し、「ジェンダーと開発（GAD)」研究および社会開発論に立脚して分析したものである。取り上げた事例は、女性の意識改革と地位向上を目指す参加型開発プログラム「マヒラ・サマーキャ（女性の平等的価値)」であり、21 ヵ月のフィールドワークで収集した、女性の語りの分析を主要な方法論とする。本論文は、従来の規範と変革の狭間で葛藤し、戸惑い、揺れ動く女性の心の動きを克明に描写するとともに、その揺らぎを「多元的自己表出」という概念で分析し、社会変化のプロセスをより微視的に把握しようと試みた労作である。

論文は５章からなる。第１章では論文の目的と意義、先行研究のレヴュー、マヒラ・サマーキャの概要、調査地の概況が記される。第２章では、女性の行動を制約する規範（パルダー）を、S村における結婚、労働、出産をめぐる女性の語りの分析によって描写する。規範を遵守する原理は、自らの仕事・行為（カルマ）と運命（キスマト）は、自分では変えられないというヒンドゥー的な運命論である。しかし、本章では語りのなかに、運命に抗して変わりたいと願う女性の心の揺らぎが表出していることを見出し注目する。続く第３章と第４章は本論文の中核をなす章である。第３章では、マヒラ・サマーキャの会員や職員のあいだでの呼称、集会での着席位置、マヒラ・サマーキャが主張する女性解放の言説を記述し分析する。指定カーストに属する会員は、大半が上位カーストの出身である職員を「お姉さん（ディディ)」と呼ぶよう指導されるが、この擬制的な姉妹関係は両者のあいだにある序列や差異を緩和し、「頼る／頼られる」という相互依存的な紐帯を強化している。また、マヒラ･サマーキャの言説とその価値観を共有することが、プログラムに関わる女性の連帯と平等性を生みだすと指摘する。第４章では、こうした意識改革によって女性が身につけた新たな価値観や行動規範が、日常生活においていかに実践されているのかを詳述する。変化をためらう語りと変化を求める語りの機微に注目することで、新旧の規範の狭間で揺らぐ女性の言動をすくい取り、その状況依存的で多様な自己の揺らぎを「多元的自己表出」という概念を導入して分析する。第５章の結論では、個々の女性が発露ないし発動する「多元的自己表出」の動態が、ひいては社会に変革を呼びかける、あるいは権力構造に変革を働きかける可能性があることを指摘し、「ジェンダーと開発」研究において個人の主体性に注目していく重要性を主張する。

従来、ジェンダーと開発の人類学的研究では、マクロな制度的・構造的な議論が多く、ミクロな個人の視点に立つ場合でも、変化の受容か、変化に対する個人の抵抗や葛藤に注目する傾向があった。これに対して本論文は、変化に抗する側面だけでなく、変化を選択し、変化を促そうとする女性の言動に注目した点で先駆的であり、その帰結として当事者の語りの分析に取り組み、心の襞に肉薄したことは高く評価できる。本論文が女性の主体性やエンパワーメントをめぐる議論を活性化させることは疑いの余地がなく、Escobar（1995 *Encountering Development*, Princeton Univ. Press）などに見られる代案なき開発批判に対して、当事者の語りと開発の現場のリアリティから、反論できる突破口を開いたことは重要な貢献である。なお、主に第３章の内容と議論は、日本南アジア学会の学会誌『南アジア研究』18 号に英語論文（査読有）として掲載され、学界の評価を得ている。

ただし課題も残している。本論文では、主として調査者によるインタヴューの会話を当事者の語りとして分析するが、マヒラ・サマーキャの会員や職員のあいだでの会話など、他の文脈における語りについても言及してほしかった。また、個人の語りの分析という方法論の長所が遺憾なく発揮されていることは高く評価するが、そのまさに反面として、マヒラ・サマーキャおよびＳ村の構造的・社会的な記述がやや不足していた。これらの点については、今後のさらなる展開を期待したい。

このようにいくつかの課題が指摘されるものの、本論文で提示されたデータとその分析は、「ジェンダーと開発」研究にとって貴重なものであり、個人の主体性の議論は社会開発論の分野において高い学術的意義を有している。したがって、審査委員会は本論文が学位を授与するに値するものと判断した。